２１	お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
	冨安毟久代	女　性	８４歳	１８歳	八名井

①　８月１５日は，どこでどんなことをしていましたか。

三重県名張市で，飛行機用のガラスや点火線などを作る軍需工場で働いていました。富岡青年学校から３人学徒動員され，名古屋市港区の愛知化学で働いていましたが，空襲をさけるために工場の疎開で名張に移ったのです。

②　終戦のことを，どこで，どのように聞かれましたか。

名張の軍需工場のラジオで聞きました。

③　敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

日本が負けたということを聞いて，みんな泣いていました。でも，戦争が終わってよかった……という気持ちもありました。

④　体験の中で，子どもたちに語り伝えておきたいこと

「学徒動員　～　怖いことばかりで……」

昭和１６年，富岡青年学校に通学していました。勉強をするというより，訓練や作業ばかりが多かったように思います。とても大変でした。鍬をかついで行進する練習をしたり，大八車やリヤカーをひいて宇利峠へ草刈りに行ったりしました。刈った草は干して，軍馬用に供出するのです。また，誉の家*1へ行き，いも堀り，麦刈り，株ぬき，といろいろな仕事をしました。みんなお国のためだと思って働きました。

▲玄関にかけられた表札
（協力：奥三河郷土館）

私が学徒動員されたのは，昭和１９年のことです。

昭和２０年になると，名古屋は何度も空襲にあいました。頭の上をＢ２９が白い雲を作って飛んでいくようになりました。６月９日，運河の反対側にあった愛知時計が空襲にあいました。学徒動員された人など，およそ２，０００人が亡くなったそうです。その時は，愛知化学は目標ではなかったようで助かりました。怪我をした人がいっぱいで，運河に飛び込む人もいました。私は，腸が飛び出した人を見ました。その人は腸を腹の中に入れようと押さえていましたが，まもなく亡くなったそうです。あんなに腸が長いものとは知りませんでした。怪我をした人ばかり見ていると，血を見たり手当をしたりするのも何とも感じなくなり，不思議でした。

名古屋工場が危なくなり，名張へ工場が疎開することになりました。名張では，女子高校の体育館や校舎を借りて生活しました。工場の仕事は，材料が少なくなって思うように作れなくなりました。

---

*1　戦死は，お国のためで名誉なこととされ，その家は「誉れの家」としてたたえられた。

Ｂ２９は，毎日西の方から東へと飛んでいきます。ある時Ｂ２９が，赤目（名張市）で墜落したという連絡がありました。捕虜になったアメリカ人が高校に連れてこられました。そのアメリカ兵に向かって，「おれの家内が殺された」と言って，石を投げる人もいました。警察は止めていました。５人いたと思いますが，みんな若かったです。そのうちの一人は女の人で，びっくりしました。通信兵だということでした。女が飛行機に乗るなんて，日本では考えられないことで，とても驚きました。当時，英語は禁止されていましたが，高校の先生が英語で話をしていたのをよく覚えています。すぐに，車で連れて行かれました。

機銃掃射で，怖い思いをしました。本社へ行くように言われ，名張から名古屋へ電車で向かっていた時です。空襲警報があって電車が止まっていた時，艦載機の小さな飛行機が低空で飛んできたのです。「電車から降りろ」と言われ，多くの人が降り，電車の陰や下に入りました。私は，死ぬ時はどうせ死ぬんだと思って，車内に残りました。艦載機は低空で飛んで来て，機銃掃射を浴びせたのです。電車の右側に避難した人は，車輪の下にいても何人か亡くなり，大勢怪我をしました。私は，怪我をしなかった人といっしょに，一生けん命怪我人の手当をしました。そんなことをしているうちに，ラジオの玉音放送があったのです。

（写真提供：冨安垚久代さん）

▲「訓練」　昭和１７年１０月

▲「朝会」　宇利峠へ草刈りに　昭和１７年８月

▲ 宇利峠から帰ってきたところ

干し草づくり

草は乾そうさせ、軍馬の飼料として供出した。昭和二十年には、清水野小学校の校舎が干し草の倉庫となり、天井までつめられたという記録がある。（P－92－参照）